
ルガマの軌跡

セイクー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルガマの軌跡

【Zコード】

Z65930

【作者名】

セイクー

【あらすじ】

テンプレ宜しく異世界にとんでもなにに紛れていいく
テ
青年

若干ネガティブで、女性にも多少のコンプレックスと偏った拘りを持つてもいる

そんな少年は大した成長をするわけでもなしに非日常に紛れしていく
物語である

とりあえず主人公の最初の時点では付属される能力はちょっとしたガ
ンダルブみたいな、結局ハーレムみたいなことになりそうですが、
まあ気に入ったキャラには基本リア充にします

牢屋にて（前書き）

ヘタレ success story、in 異世界
スタート

「起きなさい」

自分の体が誰かに揺らされている、瞼を開ける、そこから現れた光景に思わず一瞬呼吸を無意識に行えなくなつた。

切れ長のネコ耳が視界を塞ぐ、それらが少し離れると、脳に視覚から情報がゆっくりと入ってきてやつと自分のおかれている状況が頭に入つてくる。

「ここは恐らく自警団の牢屋である」と、またあれから俺が意識を失つてしまつたとゆづつ。

そして、唯一わからぬことの多い少女が誰であることだ

（なんでここは俺の睡眠を襲うて、あまつねにこんなに偉そつなんだ）

男は、幾らこいつの顔が比較的美人だとはいえない気分ではない。と思うと少女に讶しい眼をむける

「何よ、なにか文句でもあると言ひの？」

目の前の少女の特徴を大雑把に説明すると、金髪の長髪で眼がつり上がり氣味だ、少し高圧的に傲慢そうこじらりも負けじと睨んでくる

「人様の眠りを妨害する権利をお前は有してはいない」

男は睨んだままでいい放つ

「お前じゃないわ、シンシアよ」

「そのシンシア様とやらは、どうして俺の睡眠を邪魔だてできると
いつので？」

精一杯嫌みに聞こえる様にこいつてみる

「あら、以外に言葉遣いというものをわかつてているじゃない、すぐ
好感を持てるわよ、ならば答えてあげるわ、この牢屋には私とあ
なたしかいない、なのにあなたが寝ていたら私の話し相手はいない
じゃない」

わかるかしら?とシンシアは言つ

「…」

あきれて言葉がでないとほんのこことかと、のちに酷く疲れた顔で哀
愁を漂わせて語ることに成ることは今の男には予想も出来ない事で
ある、現に今の顔も大分疲れている

「まあこいつって、今は話し相手になつていてくれるのだから、不
問としてあげるわ

さも有りがたいでしょ?と言いたげな顔をしている、なんだこの
牢屋の中の御嬢様は

疲れすきじめなどへなつた男はさうでもなれとこつ精神異常により

「光榮至極」

壊れていいくのである

「素直ね、良じことだわ、とこれであなたの名前を聞いていなかつたわね」

「わたくしめの名前など聞く価値もございません、シンシア様のお耳が汚れてしまつます」

「あなたは、素直に名乗ればいいのよ、それに不便だわ」

牢屋にて（後書き）

嘩柳朝暁 かりゅう ともあき

17歳身長は178cmと中途半端

スペックとしては、格闘技経験は少なからずもあるが、あくまで趣味の域を越えず、怠慢なら素人相手には苦労もしない程度

けしてイケメンではないがただいま絶賛モテ期爆進中だ
主に理系

「ふーん朝暉つていうの、東に主にすんでいる人たちが主に使つて
いるインストネーションね、で朝暉はなんで捕まつてるのよ」

顎に手をかけて小汚ない椅子に腰掛けながら見下ろす、幾分か御嬢
様のイメージより逞しいと朝暉は思つ

「ええ、少し恥ずかしいことなのですが、この街で恐らく少しあは偉
いお方に暴言を吐いてしまつたんです」

「フフフ、暴言つてどんなことを言つたのよ」

とも樂しそうに笑ひシンシア

「ところで、シンシア様はどうこをひきこむ？」

少し不自然ではあつたが強引にしまかす

「そんなことあなたに言つわけないでしょ……つてこつもなうこ
とこだけ、特別に教えてあげるわ」

ある街の市長邸、地方の奮興の一貫として王家（王都）からの使者及び主要都市などの市區長等が集まつて知恵を出し合ひ、となつてゐる

今回はこの街が開催地となり、定例道理に会合を執り行つたあと別会場に移動し、ちょっとだけ華やかなパーティが開かれる、そんなパーティにある街の貴族の一家の一員としてシンシアは参加した

今回の会合に参加しているメンバーの中にシンシアの個人的に会話できるような若いこは来ていない、特に毎回のことではあるが、シンシアも毎回きているわけではない、早い話しが暇を持て余してゐるのである

ソフトドリンクを、侍女から貰い、思い思いに傾けていると少しきから、侍女が早足でかけてくる

「シンシア様、お楽しみですか？」

「全然だわ、少しは催しものにもう少し気をかけて欲しいわ

「そんなに大きな声で言つてはいけませんよ、まだ終わりまだ大分あります、中にはシンシア様の趣向にあつた催しがあるかもしれません、最後までお耐えください」

それでは失礼します、お侍女は言つてまたもとの場所に消えていく

そんな侍女の対応に、小さくため息をつくと

踵を返してパーティ会場から出ていった

「そして、抜け出して街を歩いていたら、歩いてた男たちともめて、こうなったってことよ」

終始どこか楽しげに言つシンシア

「壮絶ですねえ、大分省かれているみたいで、それは「ひらもですから気にしませんが」

あきれた様にいっていると、誰かが独房に降りてきたみたいである
長身の燕尾服の男性、明らかにこの空間に相応しくない違和感を漂
わせている

「御嬢様お迎えに参りました」男性は軽く会釈しながら言つと牢屋
のかぎをあけるとシンシアを連れていく

「またね」

そうして牢屋には静肅が戻ったのだった

そして朝暉は一人思う なぜこうなつたと

嵐が過れるナリナリ（後書き）

シンシア・エルド・カリシルネ・ゴーフォン

年齢は朝暁と同じ15

身長160 タイプも悪くなくスレンダーで胸も順調に成長している

金髪のストレートを肩まで下ろしている

主にシンデレ担当だが、ヒロイン候補としては薄い
地方を統治している貴族の長女として生まれる

血やへある小高いおか（前書き）

警備の者

自警団みたいな職代々やる家族は継承される
親から子に

血やへある小高いおか

俺こと嘸柳朝暉がなぜこのようなトンデモな状況にいるのかといつのか、それを思い返してみることにする

中学の卒業式のあと、俺の唯一の友達である奴とそれの取り巻き数人で打ち上げまでの時間を潰すのに付き合つことにあつた。無論、打ち上げには参加するつもりはなかつた、それに関して友達は来るよう促してきたが、おそれらく自分は皆にお呼びでないことをなどを言つと、呆れたような顔をして一応了承した、なぜあきれるつと叫びつと憐れみの表情をするので、一発殴つておいた。

話しが逸れたが、そのあと友達等と別れて自宅へと帰宅して中学校のお記憶を反芻していた。ああ、録なことなどを…してないなと思つていたとき

部屋に不穏な気配を感じた気がした、俺にそんな能力はないのになあ、確かに感じた

刮皿して自分の回りを見渡す

「はつ？」

窓の閉めてある部屋に空気の動きをみた、どこから、そよ風程度だった、戸惑つていると、それは俺認知から外れているあいだに空気の奔流は部屋を荒らしていき強さは更に増し続けていく。危機を感じ

じて対処を考える間もなく俺の視界が瞼が無意識に降つる」と云ふ
り閉ざされていく

「のわあああつつ……！」

このときの自分に会えるなら、なんの反応も対処も出来ない不甲斐
なさに感謝の意こめて殺してやつたこと、今は思つていて
気がついたら

「ビリだよ！」

キヨロキヨロと自分の周りを見渡す、見たことのない西洋風の白壁
の街を見下ろしている、自分のいる場所が少なからず高所にあるこ
とがわかる、今はおそらく早朝だらう日の出を確認できた、空に赤
みがかつていてる様子はない。次の瞬間、目眩をかんじる

「く…はつ あ」

次には吐き気を感じ、動悸の速度がより速くなる感覚を覚える。俺
はこの感覚に覚えがある

高山病だ、しかしなぜ？

混乱したまま、意識を手放した

*

「……おい、おい起きるー。」

少年のよつなこえがする、それに促され眼を醒ます

「がつ、くあ

まだ残る氣持ち悪さに苦しみながら、上体を起こす。

「おー大丈夫か?」

少年の心配するよつな声が聞こえる

「ああ、概ね大丈夫だ」

眼を開けると青紙の少年がたつていた、さつきの場所からは動いていないみたいだ

「俺はレン、警備の者で今は親父が責任者で、今ここにむかってい
る、とりあえずなんでここにいるか、どうやってここにいるか教え
てくれ」

レンと言つ少年は早口こせまる。ビヤやら疑われているぽいな、こ
うゆう時はじつだ

「俺の素性を話すとしても、お前じゃ力不足だ、その責任者が来た
ら話すとさせて貰う」

朝暉は突き放す様にいう

「…そりか、ここは立ち入り禁止区域だ、そこから魔力の反応がし

たから駆けつけた、お前はここに魔力を不可思議に使用した疑いで不審者として認識している、更には不正に侵入しあまつさえ、こちらに敵対する態度をとったものとして拘束させて貰つ

レンはどこからか両刃の剣をとりだし朝暉にせまる、

(魔力？それに今どこからだした)

朝暉はそつ思いながらも、迫る刀身の横に拳打を叩き込んでいなす

「なつ、やはり只者じやない、な！」

いなされた反動で手首を返して下から切りかかる

「正當防衛つてことで」

半身にからだを翻して避けそのままの勢いで脇腹に左の裏拳を叩き込み、半歩踏み込んで左の肘を降り下ろし一回転して回し蹴りを刀身もろとも首もとにぶつける

血が～ある小高いおか（後書き）

レン・T・バポット

朝暉に剣をつつけた少年、青髪のショートの髪で、ホントは穏やかな明るい性格だが、警備の仕事に誇りをもつていて、その仕事にはげんでいる

ときは性格が変わる

身長は朝暉より少し小さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6593o/>

ルガマの軌跡

2010年11月8日12時58分発行